

道徳通信

令和4年1月14日（金）

大坂上中学校

コロナ感染拡大の影響により今年度の道徳授業地区公開講座も中止となりましたが、この通信にて大坂上中学校での道徳授業への取り組み内容をお知らせします。

全校で「命」をテーマに12月21日（火）第1校時に道徳授業を行いました。授業のねらい、読み物資料のあらすじ、生徒の授業感想等を掲載します。

第1学年

【資料】

『いっぱい生きる 全盲の中学校教師』（明日への扉 学研より）

【あらすじ】

この資料は、念願だった教師となった主人公が、両目の視力を失い、挫折し絶望するが、家族や多くの人々の励ましによって努力し、困難を乗り越え、再び中学校の教壇に立った内容です。

【授業の感想】

- 何事もマイナス思考に考えるのではなく、プラス思考で考えていけるようにしていく大切さに気づくことができた。いつも「どうせ自分は・・・」と考えることが多かったが、そのような考えではなく、「まずはやってみる」という考え方をもっていきたいです。
- 自分のいのちがあるかぎり、どんなことも自分から逃げずに自分から堂々と立ち向かっていきたいと考えることができました。
- いのちに関わる病気やけがをしても、そこから逃げるのではなく、いのちを守り一生懸命に生きていくことが大切だと気付いた。また自分を支えてくれている人や、自分のいのちを育ててくれた両親に感謝して生きていくことも改めて考えることができた。
- どんなに辛いことや大変なことがあっても、あきらめずに努力していき、自分の命を精一杯に生き抜くことが大切である。また新井先生のように困っている人や辛い人を助けてあげたいと思います。
- 人の命は必ず一つしかないから、これからの人生を大切にし、挑戦していくことを忘れない。
- 自分が嫌になったとき、そこで命を捨てないで、自分と向き合ってしっかり自分を見つめなおす事が大事であると思いました。逃げるのではなく、立ち向かって、よりよく生きられるようになりたいと思います。

【授業の様子】



第2学年

【資料】

『絶やしてはならない 緒方洪庵』（明日への扉 学研より）

【あらすじ】

盛んに長崎に蘭学が入ってくる頃に生きた洪庵は、人々を天然痘から救うために、牛痘苗が輸入されるのを待ち続け、輸入されるとその痘苗を分苗し、日本全国に種痘法を広め、活動に反対されても痘苗を絶やさないように活動続けた。

【「どんな思いが洪庵を支えてきたのだろう。」に対する考えや気持ち】

- 医療は世のためにあるという気持ち。
- 「子供たちを救いたい。」という洪庵と同じ思いをもっている人たちが近くにいたから、大変なことがたくさんあっても前に進み続けることができた。
- 未来のある子供たちを病によって苦しんでほしくないから、今の自分にできることを最大限に尽くすという思い。
- 犠牲者をこれ以上出させたくないという思い。
- 自身の周りの多くの小さな命が失われることだけは止めなくてはならない。また、かつて自身が味わったあの苦しみを他の子供たちに味わわせたくない。
- 子供たちを病の苦しみにさらさないようにするには、今ここで自分がやらなければ次がいつになるのかわからない。だから、今自分がやるべきなんだという思い。
- 必ず助けられるという自信があったからあきらめなかった。
- この天然痘によって人々が苦しんでいるのを見たくないという思い。
- とにかく人を救いたい、助けたいという気持ち。自分と同じ思いをしてほしくない。
- 洪庵には仲間と組織があったので、その人達が洪庵の支えになっていたのだと思う。（洪庵と仲間の思いは一緒。）
- 人を救いたかった。

【授業の様子】



第3学年

【資料】

『優介の決意』（明日への扉 学研より）

【あらすじ】

「臓器提供意思表示カード」を持つ優介が事故に遭い、脳死状態となった。しかし臓器提供は行われず、優介は息を引き取る。加奈美は「それがよかったのか」考え続ける。

裏面に続く

臓器移植について、本人や家族、臓器を提供する側とされる側など様々な立場の意見を基に考える。

【授業の感想】

- もし自分が脳死状態になったら臓器を提供したいと思った。
- 授業の資料で出てきた「他の人の一部となっても命をつないでいく」という考え方に、すごいと思ったし、臓器提供についての一つの答えだと感じた。
- もし自分が難病だったら臓器移植してほしいと思うけど、提供者の命や遺族のことを考えると複雑な気持ちになった。
- 自分は臓器移植するのも、されるのも違和感を持ってしまい、どちらもしたくないと思った。
- お母さんやお父さんは私の臓器が提供されることに絶対に反対すると思う。
- 授業の資料にあった「肺移植の5年生存率は半分くらい」というのに驚いたし、臓器移植するなら絶対に上手くいってほしいと思った。
- 人の命の重さを改めて感じた。命について深く考えることができた。
- 臓器提供する側の家族の決意は凄まじいものだった。とても難しい問題だと感じた。

【授業の様子】



10組

10組では「一次救命処置」を学び、「救える命を救うための行動を学ぼう」というテーマを基に授業を行いました。授業ではマネキンを使用し、胸骨圧迫から AED の装着を実際に行いました。また AED を要請したり、119 番通報をお願いするため掛け声をしたりするなど台本を用意して、一次救命処置の一連の流れを実際に体験しながら学びました。

生徒たちは胸骨圧迫の行い方、AED の装着する位置、AED と 119 番通報を要請するための掛け声など緊急性が求められる行動に最初は戸惑いながら行っていましたが、一次救命処置の流れの台本をお互いで読み合い、協力しながら授業に臨むことができました。

【授業の様子】

